

九州における陶磁器生産の始まり

— 特に、有田焼に焦点をあてて —

内山 敏典

はじめに

九州の陶磁器生産は 16 世紀から 17 世紀初頭にかけて朝鮮半島の技術を導入したことが起点となる。とくに有田焼は、17 世紀初頭に豊臣秀吉の命により朝鮮から連れてこられた技術者のなかで、多くが陶工であったことに起因している。これらの陶工は連れ帰った各藩の武将などの下での生産をおこなっていたが、有田の地では泉山で磁器の原料となる陶石が発見され国内で初めてとなる磁器の生産がなされた。初期の伊万里焼は朝鮮で生産されていた器（厚みがありシンプルな染付の文様）の技術に影響を受けたものであり、有田での窯による生産は、1640 年代に多彩の色を用いた柿右衛門様式にみるような磁器生産が主流となっている。

当時の染付は単色であったが、これらの焼き物は革新的であり、鍋島藩の伝統工芸としての作品も多く作られることになる。1688 年から 1704 年までの元禄期は江戸時代のなかで経済的に豊かであり、その時代には赤や金色の色彩の豪華な文様の金襴手様式の技法が生まれている。一方、1650 年代には、オランダ東インド会社が柿右衛門様式などの有田焼を買い付けるようになり、伊万里港から主としてヨーロッパ諸国に輸出され始めた。そこには明朝から清朝へと政権が移行（いわゆる明清交代）する時であり、明の磁器の生産地であった景德鎮の衰退が関係している。その景德鎮の衰退に代わって有田焼の発展があり、それには父親の仇である清朝に抵抗する鄭成功の役割があった。

ところで、このように有田焼等の歴史を通じた発展をテーマに本稿を作成し、web 上にアップロードすることを目的とする。このテーマの動機となったのが TVQ 九州放送で 2023 年 11 月 9 日（月～金の午前 9 時）から全 46 話の韓国ドラマ「炎の女神ジョンイ」の放送を視聴したことである。このドラマは 16 世紀後半の第 14 代国王の宣祖時代に女性として朝鮮で初めてサギジャン[沙器匠：司饗院（サオンウォン）に所属して王のための器を作る陶工職人]の座に上りつめた朝鮮一の陶工であるジョンイの半生を描いたものである。すべてを視聴したわけではないが、最終回で主人公（ジョンイ）が倭国軍に捕らわれた司饗院の陶工を解放してもらうために“ケンゾウ”とともに倭国に行くところで終わっている。このジョンイのモデルとなったのは“有田焼の母”と称される百婆仙（ひやくばせん：ペクパソン：1560 年～1656 年）である（このドラマは過去に BS フジや BS テレ東でも放送）。このドラマをみて、脚色があると思われるが、“ケンゾウ”が倭国のどの藩の武将などかに関心を得て探求するものである。

本稿の構成は、Ⅰ部およびⅡ部構成となっている。Ⅰ部は朝鮮から連れ帰られた陶工と九州各藩の武将であり、Ⅱ部は肥前の戦国武将の自然クリークを城濠とした輪郭式平城をそれぞれ論じる。とくに、Ⅰ部は多久鍋島と武雄鍋島に関することが中心であり、そこには鍋島氏と龍造寺氏との関係がある。佐賀は龍造寺氏鍋島氏の下で産地が形成されており、龍造寺隆信が島原の沖田畷の戦いで有馬・島津軍に敗戦し、龍造寺氏に代わり鍋島氏が支配し、Ⅱ部の環濠集落の平城も鍋島氏関連の城である。

目 次

はじめに――	i
I 部 朝鮮から連れ帰られた陶工と九州各藩の武将――	1
1. 陶祖李参平および多久鍋島・多久安順について――	5
2. 有田焼の母百婆仙（ペク・パソン）および後藤家信について――	12
3. 有田における李参平および百婆仙・夫の深海宗伝について――	20
II 部 肥前における環濠集落の平城について――	24
4. 姉川城について――	25
5. 直鳥城跡について――	29
6. 蓮池城跡について――	33
おわりに――	37
注――	38
参考文献――	38
著者紹介――	40

I 部 朝鮮から連れ帰られた陶工と九州各藩の武将

戦国時代は応仁の乱[1467（応仁元）年]から大坂夏の陣[1615（元和元）年]が終わるまでの約 150 年間つづいた戦いが終わった後の武士の時代の争いである。応仁の乱は、室町幕府 8 代将軍の足利義正の後継者争いを発端として、全国の守護大名（室町時代に幕府から命じられて国ごとに配置された守護のなかで力をつけた大名）が 2 つに分かれて争った戦いである。8 代将軍の足利義正は後継者に恵まれなかったので、自分の弟である義視を養子とし後継者（次期将軍）としたが、その後妻の日野富子との間に長男を出産し、自分の息子を将軍にしたいとして有力守護大名の山名宗全に近づいた。やはり有力守護大名の細川勝元が足利義視の後見人であったとのことで、宗全と勝元の権力闘争が始まることになる。各地の守護大名は宗全の西軍と勝元の東軍に分かれ 1467 年応仁の乱が京都を舞台に 11 年継続した。この応仁の乱は応仁時代が 2 年間と短かったので応仁・文明の乱ともいう。また、領主化を進める守護や国人（くにびと：地方武士）により公家や寺社の荘園は横領されていていっている。さらに幕府の権威の低下が、幕府の権力が届かない地域の荘園や国衙（こくが：国の役所）の支配は難しくなり荘園制度は崩壊していくことになる。ここに武士の台頭が明確な形で始まり、応仁の乱を通じて戦国時代へと突入していった。多くの戦国大名^{注1)}はいるが、全国的によく知られている大名としては、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、武田信玄、上杉謙信、明智光秀、石田三成、伊達政宗、毛利元就、真田信繁、直江兼続、北条氏康、前田利家、小早川隆景、斉藤道三、北条早雲、松永久秀、長宗我部元親、藤堂高虎、加藤清正、島津義弘、浅井長政、黒田官兵衛、大友宗麟、立花宗茂、大内義隆、鍋島直茂、龍造寺隆信および宇喜多直家などがある。これらの大名についての詳細は参考文献[8]および[9]を参照されたい。

このなかで織田信長は天下統一を果たしかけたが、1582（天正 10）年 6 月 21 日に信長が本能寺において明智光秀に攻められ自害したことにより統一を達成できなかった。その後光秀は羽柴秀吉（後の豊臣秀吉）に敗れて、秀吉による天下統一が成し遂げられている。

豊臣秀吉は、明国を制服するため、2 度の朝鮮出兵をおこなっている。1 度目は文禄の役（1592～1593 年）と、2 度目は慶長の役（1597～1598 年）である。文禄の役は 16 万人の兵力を 9 軍に編成して朝鮮に渡航させた。慶長の役は 14 万人の兵力での派兵している。派兵は九州・中国・四国の西日本の武将・大名で、東国・北陸の武将・大名は肥前名護屋に在陣した。文禄の役において、一番隊は小西行長・宗義智・松浦鎮信・有馬晴信などの軍勢で制圧目標として平安道、二番隊は加藤清正・鍋島直茂などの軍勢で制圧目標として咸鏡道、三番隊は黒田長政・大友義統（おおとも よしむね）の軍勢で制圧目標として黄海道、四番隊は毛利勝信・島津義弘・高橋元種・秋月種長などの軍勢で制圧目標として江原道、五番隊は福島正則・戸田勝隆・長宗我部元親・蜂須賀家政などの軍勢で制圧目標として忠清道、六番隊は小早川隆景・立花宗茂・筑紫広門・毛利輝元などの軍勢で制圧目標として全羅道、七番隊は宇喜多秀家・大谷吉継・石田三成などの軍勢で制圧目標として慶尚道、八番隊は浅野幸長・宮部長房などの軍勢で制圧目標として京畿道、九番隊は豊臣秀勝・細川忠興・長谷川秀一などの軍勢である。水軍は九鬼嘉隆（志摩鳥羽）・藤堂高虎（紀伊粉河）・

脇坂安治（淡路洲本）などの船手衆である。

慶長の役において、一番隊および二番隊は加藤清正および小西行長・宗義智・有馬晴信・松浦鎮信・大村喜前などの軍勢、3番隊は黒田長政・島津豊久・毛利吉成・毛利義正などの軍勢、四番隊は鍋島直茂・鍋島勝茂の軍勢、五番隊は島津義弘の軍勢、六番隊は長宗我部元親・藤堂高虎・池田秀氏などの軍勢、七番隊は蜂須賀家政・生駒一正・脇坂安治の軍勢、八番隊および九番隊は毛利秀元・宇喜多家秀の軍勢であった。釜山浦城には小早川秀秋・太田一吉の軍勢、加徳城には筑紫広門・高橋（立花）直次の軍勢、竹島城には毛利秀包の軍勢、西生浦城には浅野幸長の軍勢、安骨浦城には立花宗茂の軍勢がそれぞれ在番衆として守衛したとのことである^{注2)}。

現在の陶磁器の産地は西国（西日本地域）が多い。これは、西日本の武将・大名の朝鮮出兵が多く、朝鮮の技術者等、とくに陶工や出兵で不足した労働力の確保のために人々を連れ帰ったことに起因している。とくに九州各藩の大名・武将等が連れ帰ってきた陶工が九州各藩の産地と関係している。ところで、李王朝時代の行政八区画が図1である。

図1. 李王朝時代の行政八区画



朝鮮王朝の漢陽は京畿道行政区にあった。現在のソウル特別市の景福宮を中心とした地域である。

李王朝時代は図のように八道であり、大韓帝国時代は十三道である。すなわち、京畿道、黄海道および江原道以外は次のように北道および南道があり十三道となっている。すなわち、忠清道には忠清北道と忠清南道、慶尚道には慶尚北道と慶尚南道、平安道には平安北道と平安南道、咸鏡道には咸鏡北道と咸鏡南道がある。

<http://a.m.wikipedia.org/wiki/朝鮮八道>より作成。

筆者が九州地域において文献上で知る限りにおいて、それらの人々は李三平（忠清南道金江の出身）、百婆仙（ひゃくばせん、ペクパソン：百婆仙の夫は深海宗伝：慶尚南道金海の出身）、高取八山（たかとり はちざん：慶尚南道昌寧郡靈山面八山の出身）、上野尊楷（あがの せんかい、金尊楷：慶尚南道泗川十時地方の出身）および沈当吉（沈壽官[ちんじゅかん]：慶尚北道青松郡）である。李三平および百婆仙は有田焼、高取八山は高取焼、上野尊楷は上野（あがの）焼および沈当吉は薩摩焼それぞれの礎となっている。また、大村喜前（おおむら よしあき）は波佐見焼等、立花宗茂は八女に男ノ子焼（80年間柳川藩の御用窯であったが、その後肥後小岱山麓に窯を移している^{注3)}など焼物の産地が誕生している。

1. 陶祖李参平および多久鍋島・多久安順について

現在の陶磁器の産地は西国（西日本地域）が多い。これは朝鮮出兵の多くの大名等が西日本の各藩であり、とくに九州各藩の大名が連れ帰ってきた陶工がこの産地と関係している。

有田焼発展には陶祖としての李参平の貢献がある。李参平は鍋島直茂が文禄の役の朝鮮出兵の際に忠清南道金江から同行してきた。多久鍋島家の多久安順（たく やすとし）に預けられ、約 18 年間のあいだ多久で最初の“やきもの”づくりに取り組み、その後有田泉山で磁石を発見し、現在の有田焼の礎を築いている。

李参平と多久鍋島・多久安順との関係は、多久聖廟の李参平顕彰碑・多久聖廟公園内にある不惑庵の李参平顕彰碑の横に掲げてある窯跡の写真、圓通寺および慶閭寺である。不惑庵の李参平顕彰碑の横に掲げてある窯跡の写真には、李参平が佐賀に来て初めて焼き物を焼いたところとの伝えがある唐人古場窯跡の写真がある。参平は唐人古場窯で朝鮮風の陶器を制作していたが、白磁製作を志し、有田の泉山に白磁用の土を発見し上白川天狗谷の地に開窯し、白磁を焼いている。

圓（円）通寺は多久市にある多久氏の墓所であり、7 代目以降の歴代当主の墓である。また、墓所には家祖である龍造寺隆信の逆修墓（ぎやくしゅぼ：生前に自らを供養する墓）がある。写真の石段の横にある墓が逆修墓である。慶閭寺は佐賀市にあり、多久安順とその一族の墓所である。また、ここには慶閭尼の墓もある。慶閭尼は龍造寺隆信の母で、後に鍋島直茂の父清房と再婚している。

多久氏は在地領主であった多久氏を前多久氏、多久安順からの多久氏を後多久氏といっている。前多久氏は梶峰城（多久聖廟の南西標高 201m の梶峰山の頂）、後多久氏は多久御館（おやかた）と佐賀城の多久屋敷があり、後者は佐賀城の屋敷に居たということである。なお、多久御館は現在の東原庵舎西溪校・市立病院付近に築かれていたとのことである。

・李参平[金ヶ江三兵衛：？～1655（明暦元）年]は、文禄役で朝鮮へ出陣した肥前国佐賀城主鍋島直茂によって日本へ連れてこられた。朝鮮風の陶器を制作していたが、白磁製作を志し、1615（元和元）年有田の泉山に白磁用の土を発見、1616（元和 2）年有田に移住し上白川天狗谷の地に開窯し、白磁を焼いている^{注 4)}。

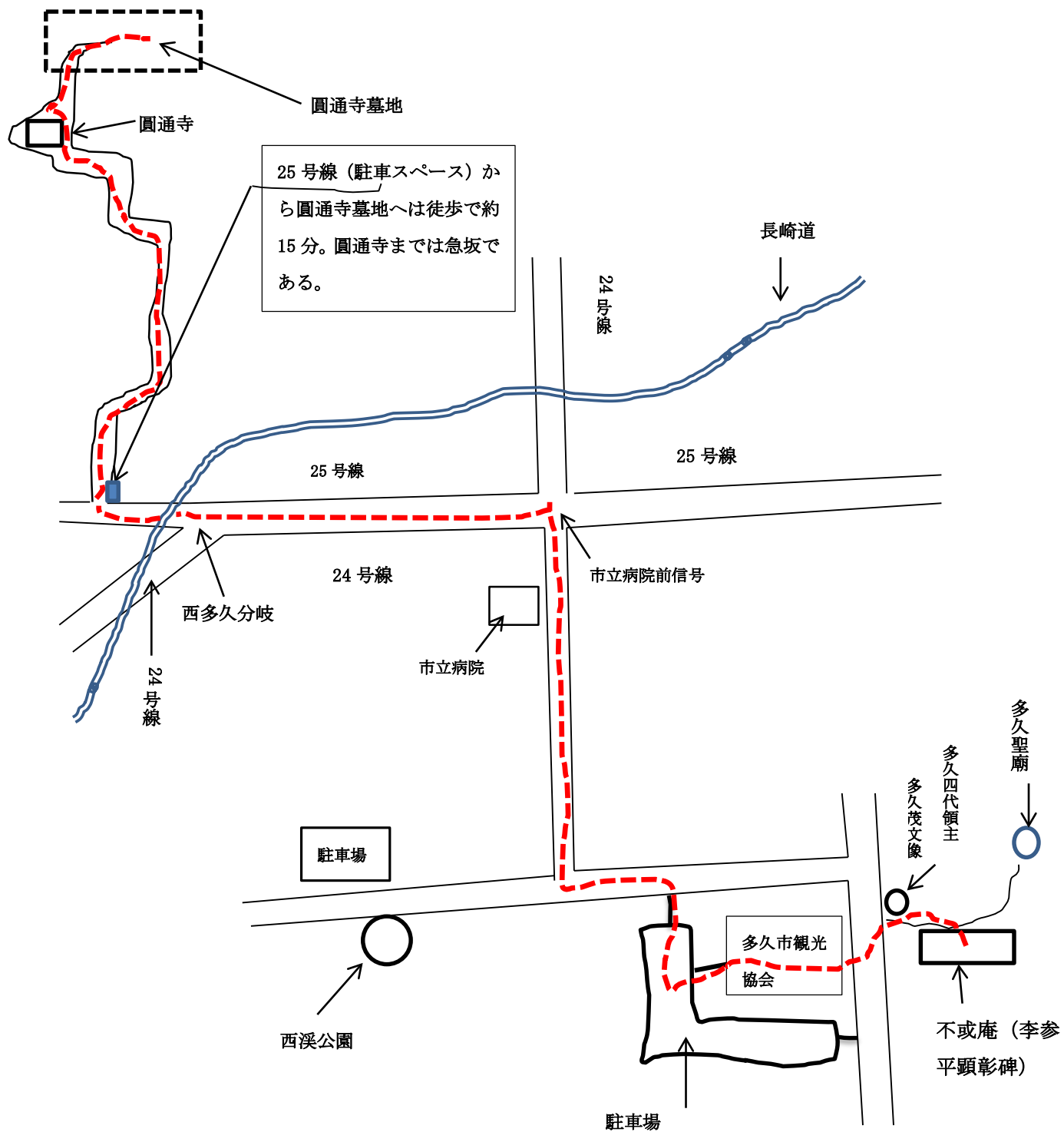
・鍋島直茂[1538（天文 7）年～1618（元和 4）年]は、初代佐賀藩主で肥前の戦国大名龍造寺隆信に仕え、天正年間（1573～1592 年）には老臣となる。1584（天正 12）年に龍造寺

隆信が島原で島津勢と戦って戦死すると龍造寺家実権を握り、1587 年に豊臣秀吉の九州征討に従って島津氏攻略に加わる。1590 年龍造寺家を相続し、大名に取り立てられる。文禄・慶長の役には加藤清正と組んで出陣している^{注5)}。

- ・ 多久安順[たく やすとし：1566（永禄 9）年～1641（寛永 18）年]は、龍造寺長信の子で、初代多久邑主となり多久長門安順と名乗る。正室は鍋島直茂の次女の千鶴である。文禄・慶長の役に参加し、その引き揚げの時、朝鮮から同行した陶工の李参平らを多久で預かり伊万里焼の源流を作っている^{注6)}。
- ・ 多久茂文[たく しげふみ：1670（寛文 9）年～1711（正徳元）年]は、多久鍋島家（後多久氏）4 代当主である。茂文は 1670 年に佐賀藩 2 代藩主鍋島光茂の三男として誕生し、後に 3 代当主多久邑主である多久茂矩の養子となり家督を継ぎ 4 代当主となっている。儒学者に学び東原庠舎（とうげんしょうしゃ：教育機関（邑校））・多久聖廟（孔子廟）を創建している^{注7)}。
- ・ 龍造寺隆信[1529(享禄 2)年～1584（天正 12）年]は、「九州三強（大友家、島津家および龍造寺家）の一人」、「五洲二島（肥前・肥後・筑前・筑後・豊前の五洲と壱岐・対馬の二島）の太守」および「肥前の熊」の異名をとった。隆信は少弐氏を下克上で倒し、また大友氏をも破ったが、有馬・島津連合軍に島原の沖田畷の戦いで敗れ自刃している^{注8)}。

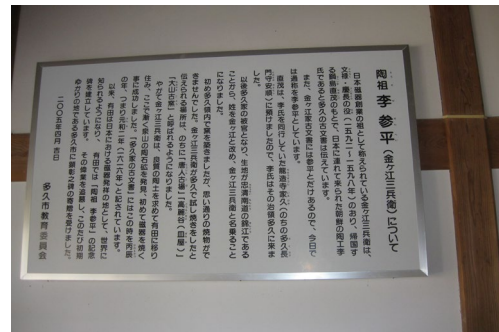
多久聖廟の李参平顕彰碑と多久茂文像（佐賀県多久市多久町 1642）

圓通寺（佐賀県多久市西多久町大字板屋 7047）





李参平顕彰（顕彰庵）



陶祖 李参平についての説明（顕彰庵）



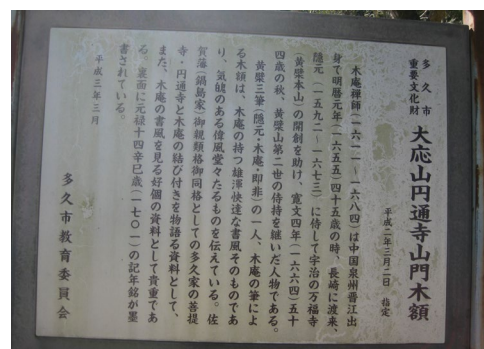
陶祖 李参平顕彰庵



多久成文公乃像



圓（円）通寺



圓通寺



圓通寺墓地



圓通寺墓地

多久聖廟公園内にある不惑庵の李参平顕彰碑の横に掲げてある窯跡の写真



唐人古場窯跡（とうじんこばかまあと：多久市多久町西ノ原）

李参平が佐賀に来て初めて焼き物を焼いたところとの伝えがある。



高麗谷（皿屋）窯跡（こうらいだに（さらや）かまあと：多久市西多久町山口）

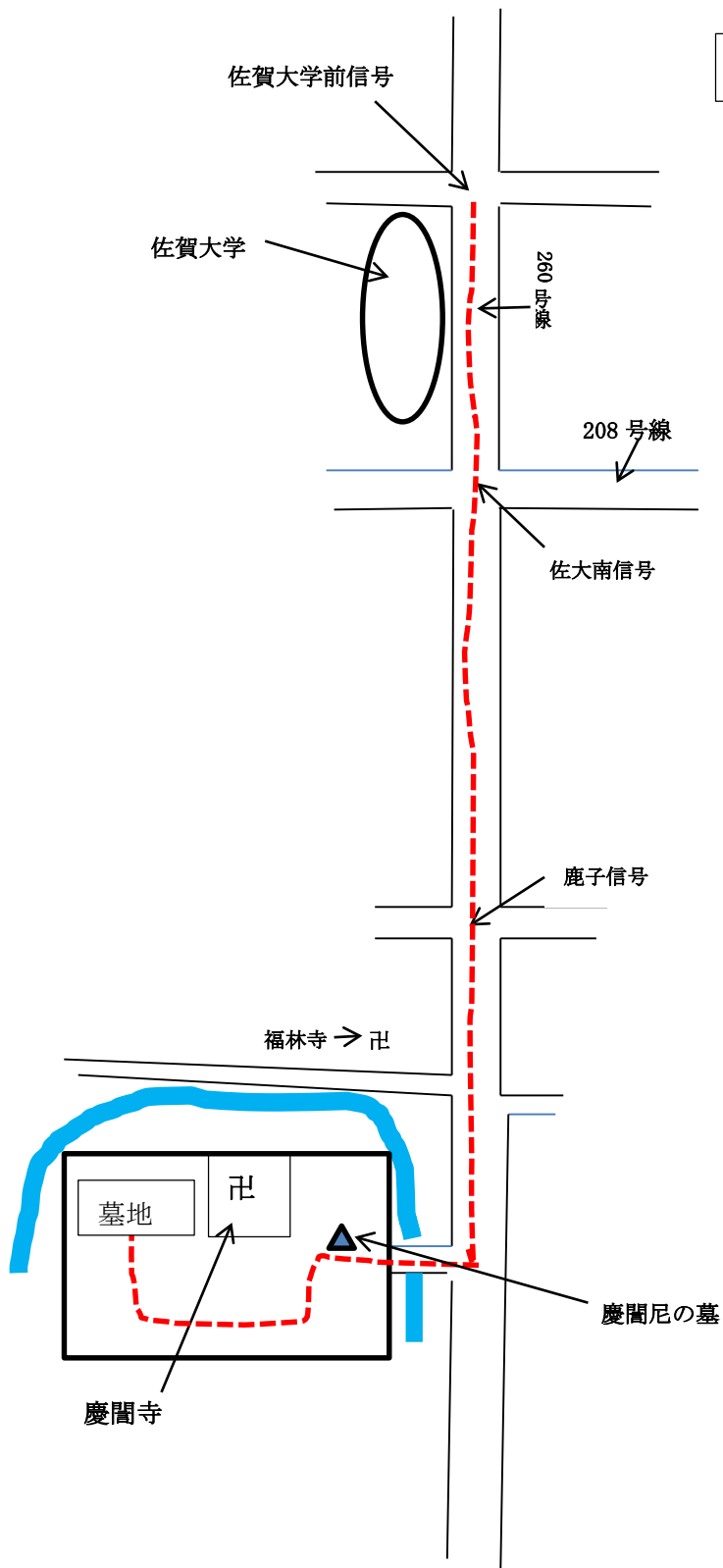
唐人古場窯から移って唐津系の陶工が合流したとの伝えがある。



大山古窯跡（おおやまこようあと：多久市西多久町藤川内）

高麗谷（皿屋）窯の後、さらに移って築いた窯で、近くに磁器を焼いた大山新窯跡や陶石を産する河内山がある。

慶閭寺（けいげんじ：佐賀県佐賀市本庄町大字鹿子 27）



龍造寺隆信生誕地 1



龍造寺隆信生誕地 2



慶間寺



慶間尼の墓



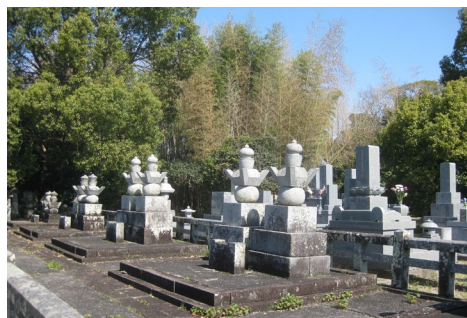
慶間寺にある多久安順と一族墓の説明板



多久安順と一族墓 1



多久安順と一族墓 2



多久安順と一族墓 3

2.有田焼の母百婆仙（ペク・パソン）および後藤家信について

有田焼の発展は、陶祖李参平とともに、有田焼の母といわれた百婆仙（ペク・パソン）の貢献をあげることができる。百婆仙は夫の深海宗伝とともに慶尚南道金海から文禄の役に鍋島直茂に従って出兵した武雄鍋島家後藤家信（龍造寺隆信の三男で後藤家の養子）とともに同行してきた。武雄の廣（広）福寺の門前でしばらく暮らし、その後内田村で陶器を焼き、近くで採れた陶石で磁器を作っている。宗伝の死後、良質の陶石を求め、百婆仙一族は有田稗古場に移動している。武雄に残った陶工は内田地区で陶器を焼いている。百婆仙の法塔（墓石）は佐賀県西松浦郡有田町稗古場にある報恩寺にある。

・百婆仙[1561（永禄4）年～1656（明暦2）年：ペク・パソン]は文禄・慶長の役の際、陶工である金泰道（キム・テド：深海宗伝：ふかうみ そうでん）とともに鍋島直茂に従って出兵した武雄鍋島家後藤家信に連れてこられた^{注9)}。武雄の廣（広）福寺の門前でしばらく暮らし、その後内田村で陶器を焼き、近くで採れた陶石で磁器を作っている。1618（元和4）年宗伝の死後、良質の陶石を求め、百婆仙一族は有田稗古場に移動している。ここで指導者として作陶し続け、96歳で亡くなっている。百婆仙は96歳で亡くなっているので、100歳に近い年齢であったということで百婆仙と称されている。なお、現在廣福寺は武雄温泉街にある武雄温泉楼門（辰野葛西事務所の設計）の近くに位置している。

・後藤家信[1563（永禄6）年～1622（元和8）年]は龍造寺隆信の子として誕生し、19代武雄領主後藤貴明の実子である晴明を龍造寺氏へ養子に出した、貴明の娘槌市と結婚し婿養子となっている。家信は龍造寺氏の合戦に参加し、1584（天正12）年の沖田畷の戦い[おきたなわてのたたかい：龍造寺隆信と島津・肥前有馬連合軍との島原半島での戦い]まで参加している。その後、家信は朝鮮出兵に1592（文禄元）年の文禄の役では加藤清正に従い朝鮮の二王子（臨海君と順和訓）を捕らえるため兀良哈（ウリャンカイ：中国東北部）まで攻め入り、1594（文禄3）年正月に帰国している。また、家信は1597（慶長2）年の慶長の役の時、家信は再び朝鮮に渡り、1598（慶長3）年の正月に蔚山（ウルサン）籠城中の加藤清正を救出しているが、その後病となり帰国し、その代理として嫡子の茂綱が出陣している。茂綱は21代佐賀藩武雄領主で鍋島家綱と名乗っている^{注10)}。なお、後藤家は現在の武雄高校周辺に塚崎城本丸跡が、その西端部に石垣の門、東端部に塚崎の大楠がある。後藤氏の塚崎城は、藤原俊仁（ふじわらのとしひと：平安時代前期の貴族・武将）の流れをくむ後藤氏＝武雄鍋島氏が12世紀から19世紀までの約700年間本

堀とした城である。武雄鍋島家の墓所は円応寺にあり、参道は桜並木で有名で、その登りつめたところにアーチ型石門がある。この石門をくぐると初代から 4 代、石門をくぐらず東側に進むと 5 代から 11 代の武雄鍋島家（後藤家信等）墓所となっている。

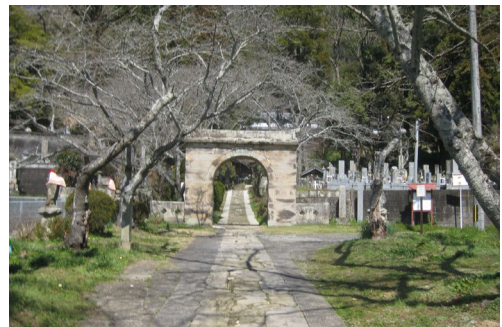
塚崎城石門（佐賀県武雄市武雄町大字武雄字小路）

また、塚崎城石門へは 34 号線
からドラッグストアコスモス
から橋を渡ると着く。





円応寺の石門（武雄市武雄町大字
富岡 10513）



円応寺の石門



円応寺アーチ型石門の説明板



石門を通り抜け、本堂へ



石門を通り抜けた墓地



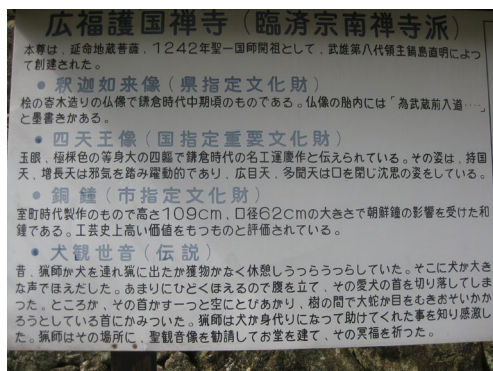
石門の説明板を右に行ったところの
墓地 1



石門の説明板を右に行ったところの
墓地 2



石門の説明板を右に行ったところの
墓地 3



廣福護国禅寺の説明板（武雄氏武雄
町大字富岡 7438）



広福護国禅寺（訪問当時は非公開）

☆広福護国禅寺の開祖は武雄領主後藤直明で、1281 年の弘安の役の際に後宇多天皇より祈
禱護国の勅願を受けたことに始まるとのことである。



塚崎城本丸跡 1（武雄市武雄町
大字武雄 5542-85）



塚崎城本丸跡 2



塚崎城本丸跡 3



塚崎城石門 1 (佐賀県武雄市武雄町大字
武雄字小路)

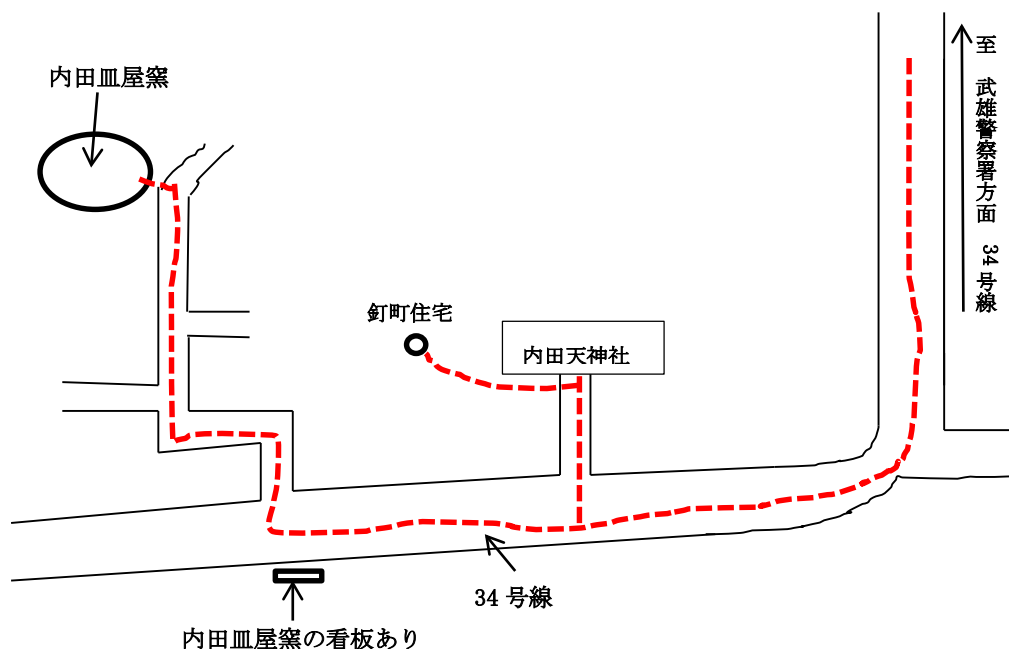


塚崎城石門 2



塚崎城石門 3

内田皿屋窯（佐賀県武雄市東川登町永野 6973 番地 1）



武雄温泉から内田皿屋窯の途中、内田天神社と釘町住宅がある。内田天神社は塚崎領主 10 代となった後藤幸明が相続争いに勝訴したことによって鎌倉柄杓天神の分霊を受けて内田天神社（主祭神は菅原道真）を創建している。その天神社の西隣に釘町住宅がある。釘町住宅は在郷武士の住宅であり、佐賀県遺産となっている。なお、ここでの説明は両案内板より記載した

34 号線を戻り武雄警察署横の下西山信号を左折すると、35 号線になる。その 35 号線は西進すれば約 60 分で有田に着く。



現在の内田皿屋窯(佐賀県武雄市東川
登町永野 6973 番地 1)



内田皿屋窯



内田天満宮 1



内田天満宮 2



釘町住宅 1



釘町住宅 2

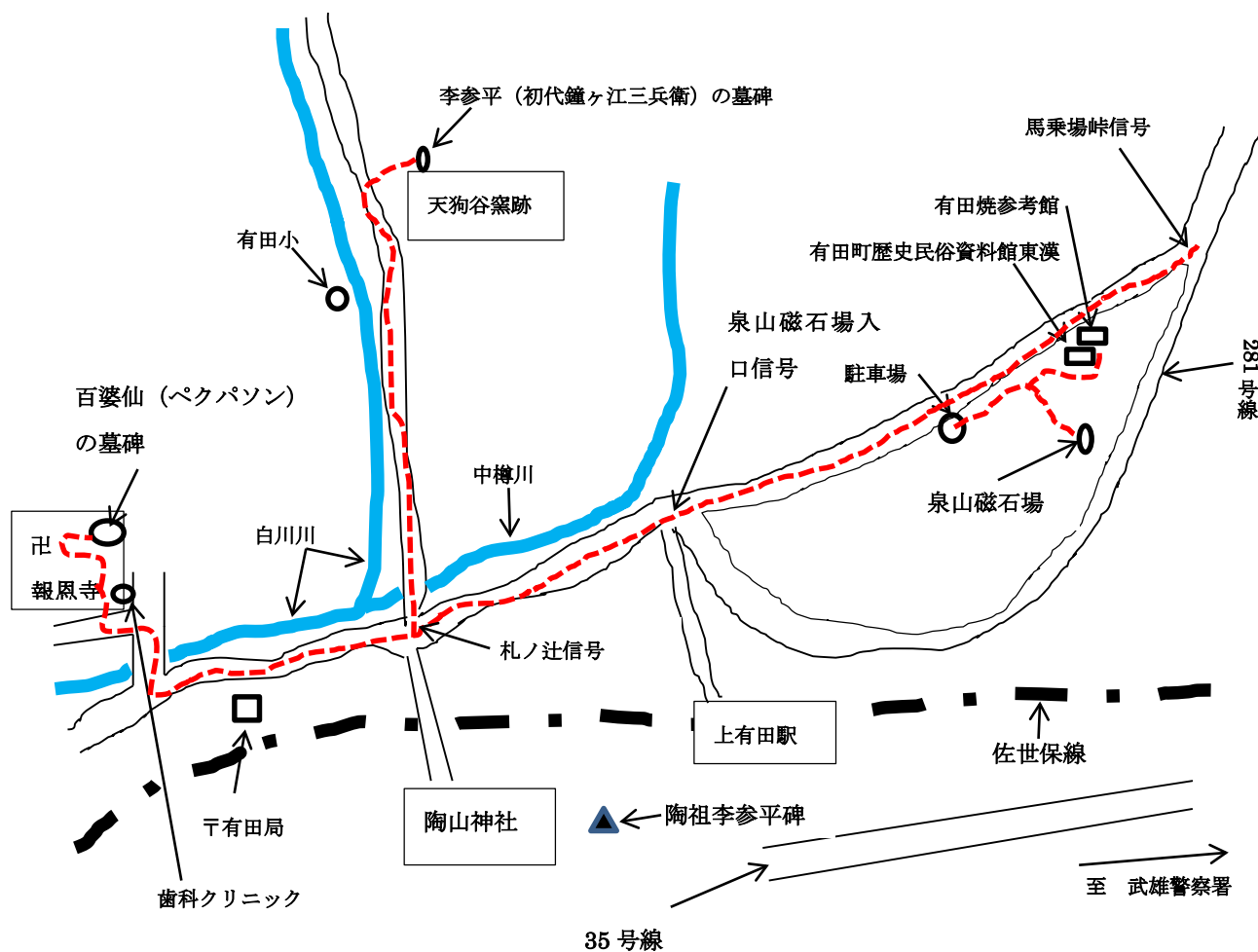
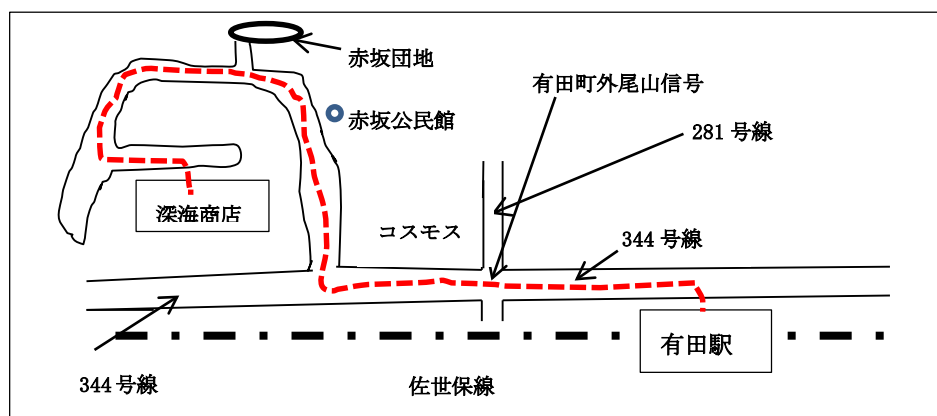
3. 有田における李参平および百婆仙・夫の深海宗伝について

本章では、有田における李参平および百婆仙・夫の深海宗伝について記述したい。

李参平は多久安順に預けられ、約 18 年間のあいだ多久で最初の“やきもの”づくりに取り組んでいる。参平は唐人古場窯で朝鮮風の陶器を制作していたが、白磁製作をめざし、有田の泉山に白磁用の土を発見し、上白川天狗谷の地に開窯し白磁を焼いていた。現在の天狗谷窯跡の近くに白川墓地があり、そこに李参平墓碑がある。14 代李参平によって作陶がなされている。また、陶山神社（すえやまじんじゃ、通称とうさんじんじゃ）があり、祭神は応神天皇を主祭神に、鍋島直茂と李参平を配祀していて、いわゆるやきものの神様である。また、陶山神社から標高差 40m のところに陶祖李参平碑がある。

百婆仙は夫の深海宗伝とともに武雄の廣（広）福寺の門前でしばらく暮らし、その後内田村で陶器を焼き、近くで採れた陶石で磁器を作っている。宗伝の死後、宗伝の技術とともに良質の陶石を求め、百婆仙一族は有田稗古場に移動し分業による協業^{注 11)}で磁器を焼いている。現在の有田における百婆仙に関する情報は稗古場にある報恩寺内の墓碑であり、子孫は有田町赤絵丙において作陶から業態を変えて 1961 年に株式会社深海商店を設立し陶磁器用絵具製造販売を行い、多くの窯元に深海の呉須・釉薬・石膏等を提供している。

深海商店（佐賀県西松浦郡有田町赤坂丙 2351 番地 223）





泉山磁石場 1



泉山磁石場 2



泉山磁石についての説明



泉山磁石



報恩寺（百婆仙の墓碑）



百婆仙の法塔案内板説明文



百婆仙（ペクパソン）の法塔（墓碑）



李参平の墓碑



李参平墓碑の説明板



陶山神社 1



陶山神社 2



深海商店

Ⅱ部 肥前における環濠集落の平城について

龍造寺家と鍋島家との関係は対立を繰り返したり、子息の交換を通じての姻戚関係で結ばれていた。龍造寺隆信の時代までは龍造寺が隆盛を極めていたが、島原半島での龍造寺隆信と有馬晴信・島津家久との沖田畷の戦いで敗北すると、肥前は鍋島家（佐賀藩鍋島直茂が継承：鍋島直茂は隆信の義弟）の時代となる。龍造寺隆信の居城は現在の白石町にあった須古城といわれている。また、生誕の地は現在の佐賀城（村中城）の西の中の館児童遊園の中にあり、水ヶ江（水ヶ江城）にある。

1章で、前多久氏は梶峰城、後多久氏は多久御館（おやかた）と佐賀城の多久屋敷が居城であった。2章で、武雄鍋島氏（後藤氏）の居城は現在の武雄高校周辺に塚崎城本丸跡が、その西端部に石垣の門、東端部に塚崎の大楠がある。佐賀城の多久屋敷を除けば、これらの居城は山城である。

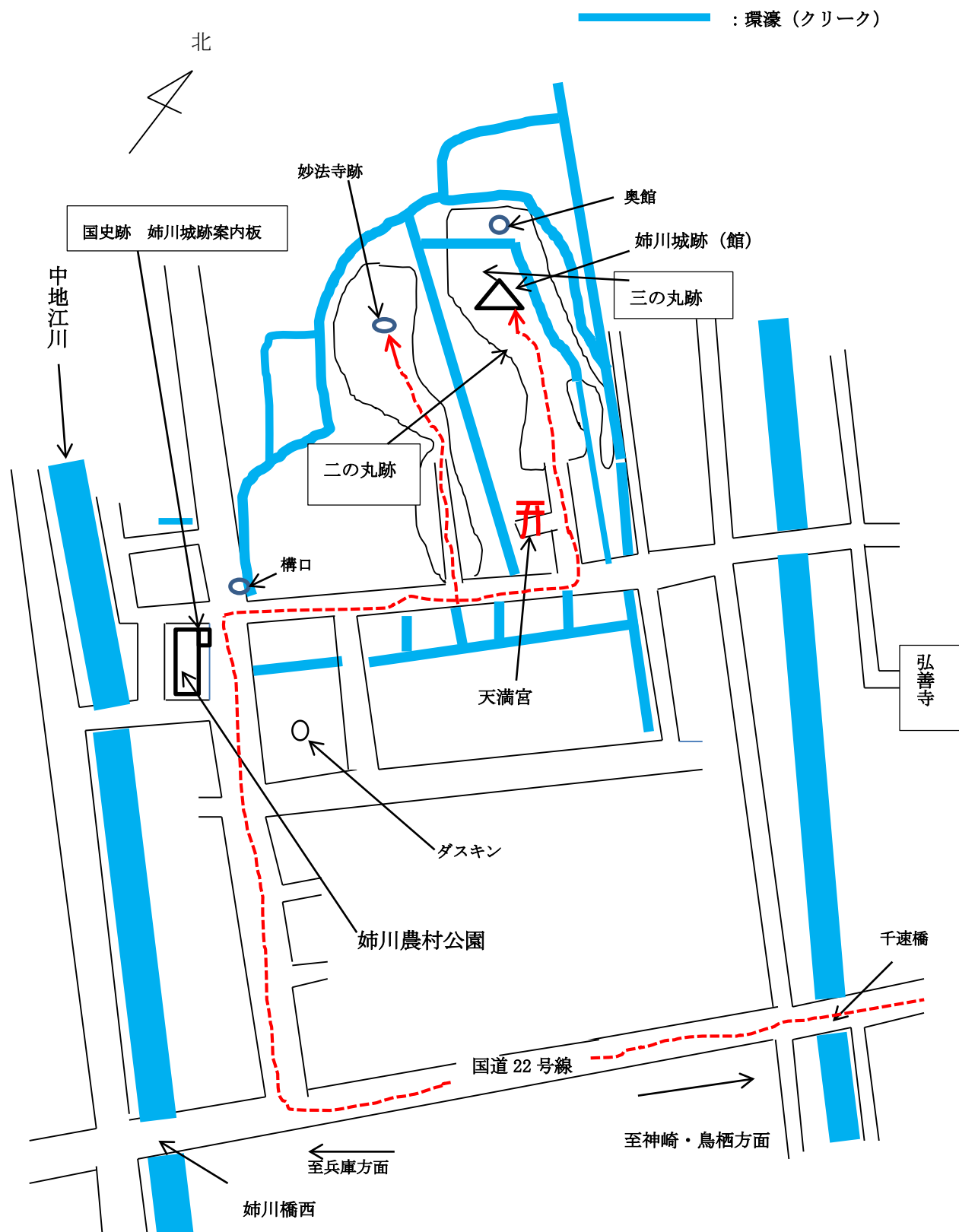
佐賀は吉野ヶ里に代表されるように環濠集落が多く、ここで取り上げる姉川城跡、直島城跡および蓮池城跡は中世の農村集落と領主や武士との関係を考える上において重要な環濠集落の平城であった。佐賀（佐嘉）城は姉川城を参考に築城されている。

4. 姉川城について

姉川城跡は佐賀県神埼市神埼町姉川にあった環濠集落の平城で、南北朝時代の1360（正平15：南朝方での元号）年に南朝方の菊池武安が築城し、その後代々の姉川一族が城主（となり、龍造寺隆信が勢福寺城（神埼市神埼町城原字北外：標高196.1mの山城）を攻めた時は本陣となった城であった。姉川城跡は2010（平成22）年国史跡に指定された。姉川城跡は輪郭式平城で“回”の字型の配置で中心に本丸があり、本丸を囲んで二の丸（南構口）、三の丸（北構口）がある。また、三の丸郭内の本丸の西側に菩提寺の妙法寺があった^{注12)}。

・勢福寺城は九州探題一色直氏によって築城された。その後、菊池氏、少弐氏、大友氏、大内氏、龍造寺氏の城となった。1540（天文9）年少弐冬尚によって少弐氏を再興したが、龍造寺隆信に攻められ落城した。隆信の次男である江上家種が城主となったが、1589（天正17）年に蓮池城に移ったために配乗となっている^{注13)}。

国史跡 姉川城跡（佐賀県神埼市神埼町姉川上分及び下分）





国史跡 姉川城跡の説明板



姉川城跡 環濠



佐賀平野の歴史とクリークゾーン
—姉川城跡—の説明板



天満宮への参道



天満宮社殿



天満宮近くの環濠



姉川城跡（館）と環濠の先の奥館



姉川城跡（館）1



姉川城跡（館）2



姉川城跡（館）3



姉川城跡（館）横の環濠

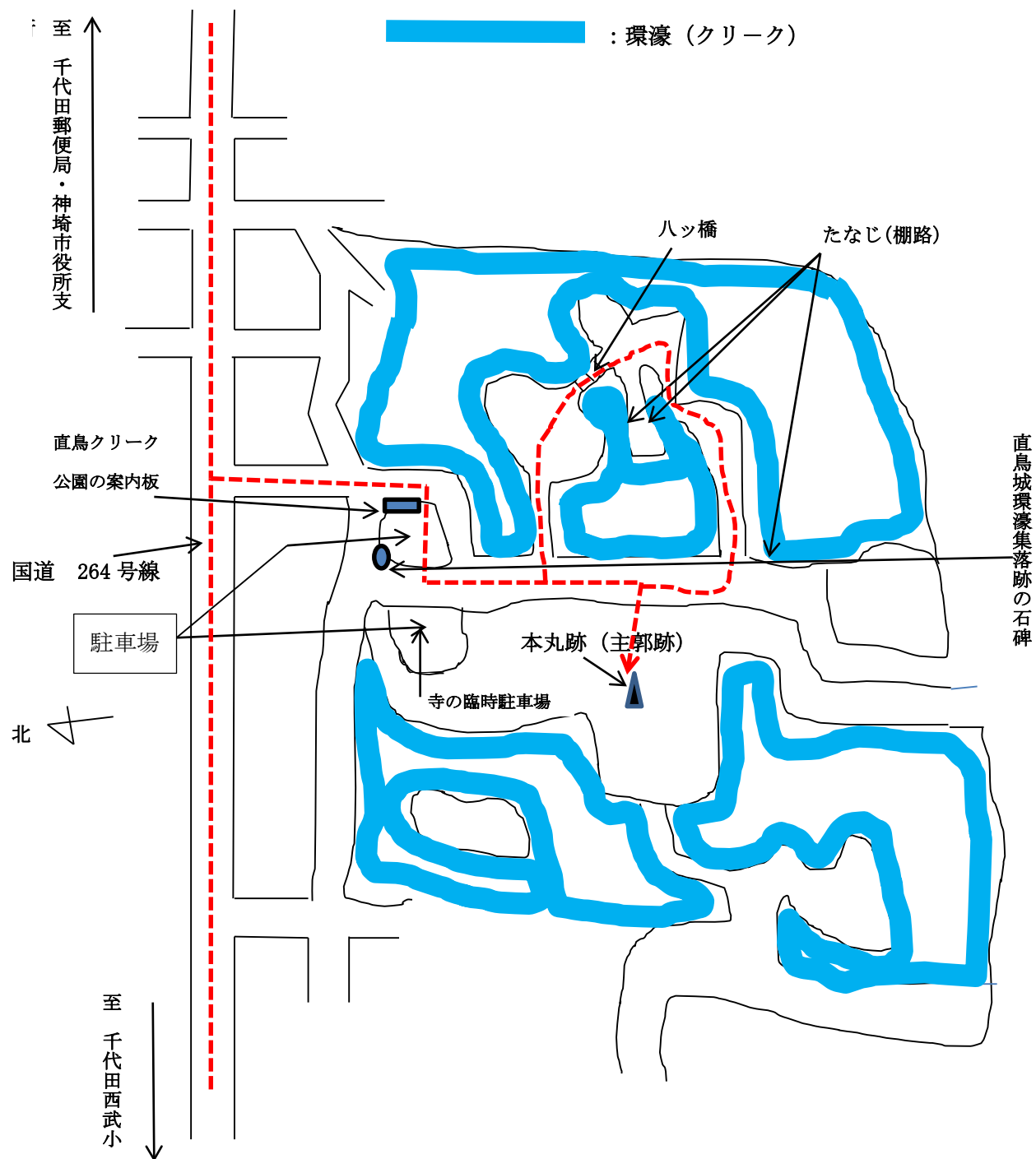


妙法寺跡への方面

5. 直鳥城跡について

直鳥城跡は佐賀県神埼市千代田町直鳥にあり、そこは国道 264 号線と城原川とが交わる直鳥橋の南西 200m の右岸にある環濠集落の平城である。築城主は犬塚家久で永正年間（1504～1520 年）とされている。犬塚氏は大友宗麟に属し筑紫惟門や龍造寺氏の家臣鍋島直茂の 1570（元亀元）年今山の戦いに敗れている。1571（元亀 2）年犬塚氏の犬塚鎮家が居住していた鎌田江城（佐賀市佐賀平野）を龍造寺隆信が攻め滅ぼしている^{注14}。

直鳥城跡（佐賀県神埼市千代田町直鳥）





直鳥クリーク公園入口



直鳥クリーク公園説明板



直鳥クリーク公園説明板



右側本丸跡（中央交流広場）



たなじ



環濠（クリーク）



環濠と本丸跡



本丸跡と東屋



本丸跡（中央交流広場）

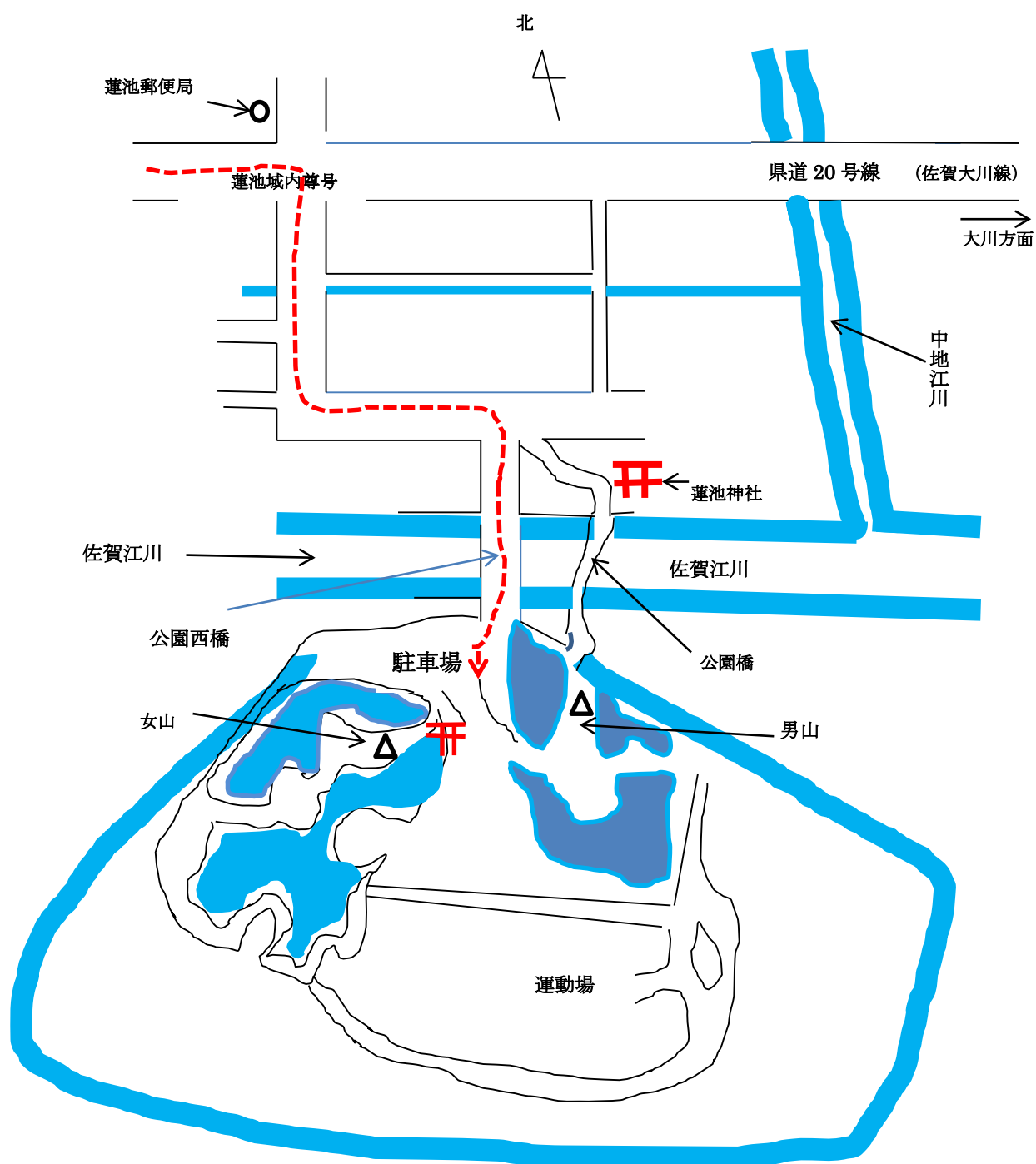


直鳥城環濠集落跡の碑

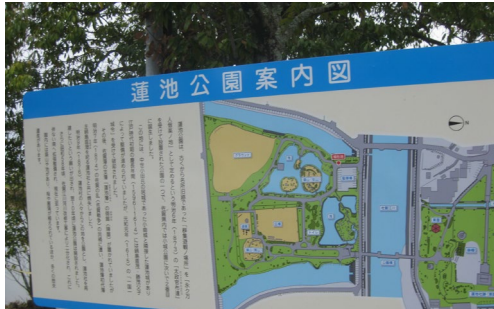
6. 蓮池城跡について

蓮池城跡は佐賀市蓮池町大字蓮池にある環濠集落の平城である。この城は応永年間（1394～1428 年）に完成し、関東から肥前国へ下向した小田直光の居城とした。戦国時代後期において、佐嘉城主龍造寺隆信の侵攻を受け小田正光は臣下として従った。後に城主小田鎮光が降伏すると、後藤家信（武雄領主）、龍造寺家晴（佐嘉藩重臣で諫早鍋島家の初代当主）が城主となっている。1584（天正 12）年の沖田畷の戦いで龍造寺隆信が戦死すると、隆信の次男の江上家種（勢福寺城主）が入城したが文禄の役で戦死したため、鍋島直茂の居城となっている^{注 15)}。

蓮池城跡（佐賀県佐賀市蓮池町大字蓮池）



：環濠（クレーク）



蓮池城跡（蓮池公園）案内図



築山：女山（雌山）



神社鳥居



築山：男山（雄山）



雲菴道人帰田詩碑（蓮池藩八代藩主鍋島直与が隠居したときの心情を十音の漢詩であらわした碑）



運動場



佐賀江湖跡（さがえご跡：川を２倍の
長さにし、有明海の干満の力を利用し
て保水と舟運を計っている。）



佐賀江湖跡（環濠：クリーク）

おわりに

九州の陶磁器産地は17世紀初頭の豊臣秀吉の命によって朝鮮から多くの技術者とくに陶工が連れてこられた。李参平および百婆仙などの一族は有田で磁器の原料となる陶石が発見され国内で初めて磁器の生産がなされていた。有田の地で窯が増加してくると、1640年代にこれまでの素朴な印象の染付文様から多彩の色を用いた柿右衛門様式の磁器が誕生している。鍋島藩の御用窯からの伝統工芸としての作品も作られていった。また、わが国において江戸時代の元禄期は経済的に豊かであったが、国内流通も盛んになり、金襴手様式の技法での作品が生まれている。東インド会社が柿右衛門様式などの有田焼を買い付けるようになり、伊万里港からヨーロッパ諸国とくに王侯貴族へ輸出されていっていた。いずれにしても江戸時代までは、茶道文化もあり大名等の庇護の下での産地は成立していたのであろう。

現在、有田焼に限らず、多くの伝統工芸産地において、その伝統技術と窯元の経営は存続の危機を迎えている。一方で、技術を着実に継承しながら時代のライフスタイルに合わせようと工夫がなされている。窯元の経営は技術を高めるとともに、自らの作品をいかに国内外の消費者にどのようにアピールし、販売方法をどのようにするかを考える必要がある。そのようなことのために、窯元経営は陶磁器についての歴史的な研究、デザインの研究、異業種交流のチャンス、情報発信の工夫など多くのことをおこなっていく必要があるであろう。

注

注 1) 戦国大名とは、身分が低い者が自分よりも高い身分の者を実力で倒すこと、いわゆる下克上で守護大名を支配するようになった大名のことをいう。なかには武田信玄、今川義元および大内義隆のように守護大名で戦国大名になったものもいる。

注 2) 文禄・慶長の役などに関することについての記述はつぎの web を参照。

<https://president.jp/articles/-/74100?>

<https://ja.m.wikipedia.org/wiki/文禄・慶長の役>

注 3) 男ノ子焼の里/八女市ホームページ

<https://www.city.yame.fukuoka.jp/soshiki/16/t01/facilities/1454653513354.html>

注 4) 参考文献[8] 1337 頁.

注 5) 参考資料[8] 929 頁.

注 6) <https://a.m.wikipedia.org/wiki/多久安順> より

注 7) <http://search.yahoo.co.jp/search?p=多久茂文> より

注 8) 参考文献[3] 75～88 頁. および参考文献[8] 1339 頁.

注 9) 参考文献[8] 1337 頁. および参考文献[4]より

注 10) 参考文献[3] 316～317 頁. および <https://ja.wikipedia.org/wiki/後藤家信> より

注 11) 分業による協業のことをマニユファクチュア (manufacture: 工場制手工業) といい、韓国ドラマの「火の女神ジョンイ」での司饗院 (サオンウォン) でおこなわれているのが工場制手工業であろう。

注 12) 参考文献[3] 171～172 頁.

注 13) 参考文献[3] 165～168 頁.

注 14) 参考文献[3] 158～160 頁.

注 15) 参考文献[3] 198～200 頁.

参考文献

[1] 有田町役場文化財課『有田の陶磁史 (183)』有田町歴史民俗資料館 2024 年 3 月.

[2] 釜堀文孝・内山敏典・黒木宏一・大淵和徳『九州の伝統工芸』九州産業大学伝統未来センター, 2023 年 3 月.

[3] 木原武雄『風雲 肥前戦国武将史—戦国武将伝と山城散歩—』佐賀新聞社出版部, 1995 年 1 月.

[4] 野村育世「有田焼の創始者 百婆仙についての基礎的研究」『日本研究』No. 62、2021 年 3 月.

[5] 小田富士夫編『風土記の考古学⑤「肥前国風土記の巻」』同成社, 1995 年 10 月.

[6] 尾崎直人『筑前高取焼の研究—筑前焼から高取焼への変容と展開— (福岡市美術館草書 5 海鳥社, 2013 年 3 月.

- [7] 歴史学研究会編『日本史年表 第四班』岩波書店, 2001 年 12 月.
- [8] 三省堂編修所編『コンサイス日本人名事典 改訂新版』三省堂, 1999 年 10 月.
- [9] 新潮社辞典編集部『新潮日本人名辞典』新潮社, 1995 年 5 月.
- [10] 内山敏典『福岡（筑前）およびその関連地域の歴史散策マップ記—とくに高取焼および元寇を例とした「まちおこし」のための文化・歴史について—』2011 年 5 月.
- [11] 内山敏典「伊万里焼国内流通の歴史入門（１）」『柿右衛門様式学—“やきもの”の技法と歴史及び美』九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター編集委員会, 2011 年 7 月.
- [12] 内山敏典「伊万里焼国内流通の歴史入門（２）」『柿右衛門様式学—“やきもの”の技法と歴史及び美』九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター編集委員会, 2011 年 7 月.
- [13] 内山敏典・黒木宏一『有田・伊万里および福岡地域における消費者の意識調査分析—新しい陶磁器需要創造および生産構造をめざして—』九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター, 2009 年.
- [14] 内山敏典・釜堀文孝・黒木宏一『九州地域における伝統産業需要の計量分析—公統計・アンケート調査をベースに—』九州産業大学伝統未来センター, 2022 年 2 月.

[著者紹介]

内山 敏典（うちやま としのり）

現在、九州産業大学名誉教授

専攻：統計学,計量経済学

経済学修士

博士（農学）

主要著書

『余暇関連財需要の計量的分析』（単著）晃洋書房, 1998 年.

『基本計量経済学』（共著）勁草書房, 2006 年.

『経済・心理・医療・看護等の教育のためのベーシック統計解析技法—電卓, Excel および VBA における計算法—』（単著）晃洋書房, 2008 年.

など多数。

九州における陶磁器生産の始まり
— 特に、有田焼に焦点をあてて —

2025 年 1 月 28 日 初版発行

著 者 内山 敏典

発行 地域史と統計処理のさわらラボ

<http://www.ut.saloon.jp/index10.htm>

E-mail: uchiyama4396@minos.ocn.ne.jp

非売品

© Toshinori Uchiyama